

ハワイ東西センター・ワークショップ 「歴史と記憶：太平洋戦争の遺産」に参加して A Report on the Workshop “War and Commemoration: Legacies of the Pacific War” at the East-West Center in Hawaii

山代宏道
Yamashiro Hiromichi

The author attended the workshop “War and Commemoration” at the EWC from August 1 to 6, 2010. Forty participants were 25 community college professors from throughout the USA and 15 university professors from Asia and Pacific Islands.

The participants listened to 7 lectures and the witness talks by survivors of the Pearl Harbor Attack, internee experience of Relocation Camp, Military Intelligence Service veteran and Atomic Bomb victim. They also visited the war sites and museums related to the Pearl Harbor Attack. War sites often become the sacred sites because of many deaths and sacrifices. Then, the pilgrims visit there.

The memorials and museums at the war sites preserve the legacies and memories of the War. This is just like that pilgrims of Medieval Europe visited the sacred sites with the churches and shrines which preserved the holy relics, that is, the legacies and memories of the saints. Present memorials and museums combine war memory and monuments for peace. The author created the slogan, “Past memory for future peace.”

During the workshop, the author also considered some possibility for “reconciliation” between Pearl Harbor and Hiroshima. Transnational migrants, that is, the immigrants from Hiroshima to Hawaii provide an important case in which both Pearl Harbor and Hiroshima are united in their family histories because many experienced both tragedies.

はじめに—ワークショップの概要

2010年8月1日～6日ハワイの東西センターで「歴史と記憶—太平洋戦争の遺産」というテーマで1週間のワークショップがあり参加した。太平洋戦争といっても、パールハーバー（真珠湾）攻撃が中心テーマであった。参加者40名の内訳は25名の全米から選考されたコミュニティー・カレッジ教員と15名の日本・中国・台湾・韓国・太平洋諸島の大学教員である。7月25日～30日に同様の第一グループによるワークショップが開催されているので、合わせるとかなり大規模なワークショップだと言えよう。また、ワークショップは2004年から開始されたが、2005年から日本の高校教員が招待されるようになったという。

1 参加目的

今年3月まで広島大学で中世ヨーロッパ史を教えていた筆者が、なぜ、このようなワークショップに参加したのかというと、つぎのような事情からである。

4月から非常勤講師をしているエリザベト音楽大学での授業「英語によるヒロシマ学」の準備も兼ねて申し込んで受け入れられた。ワークショップではヒロシマの専門家であるカリフォルニア大学サン・ディエゴ校のリサ・ヨネヤマ教授が講義することもあって、パールハーバーとヒロシマの「和解」の可能性について探ってみようと思った（本章末に、ワークショップで行われた講義と事前のリーディングリストを掲載している）。パールハーバーやヒロシマについては、ナショナル・メモリー（国民的記憶）としては歩み寄りが困難であるが、国境を越えて移動したハワイへの広島移民の視点からみたら、移民の個人史のなかで両者を結びつけることができる。広島からの多くの移民家族が両方の悲劇を体験しているからである。

miscarriages of American justice are marked in the landscape. (*Shadowed Ground* 305-8)

1970年代初めに史跡として選別されたマンザナーはもちろんのこと、引用にも見られるトパーズや、さらにはトゥーレイクも含め、1988年に「市民自由法」が成立した後、国レベルでの収容所跡地整備が着実に進んでいる今日、ある意味、それぞれの跡地がすでに聖別化されていると言っても過言ではないであろう。

これまで見てきたように、マンザナー収容所跡を代表格として、日系人が強制収容された場は、少なくとも三つの意味を持つだろう。一つは「追悼の場」であり、もう一つは「国家的理念の確認の場」、最後は「歴史学習の場」である。第一は、パーソナルな立場で、収容されていた人々やその収容所生活についての回想や死者に対する慰霊でもあれば、自らの癒しでもあり、さらにはアイデンティティを確認する場ともなるだろう。第二は、「自由」、「平等」を基本理念とするアメリカ民主主義社会の「正義」を検証する場なのである。第三については、身近な史跡観光地として、過去を追体験し、歴史を学ぶ場と言えるものである。要するに、収容所跡地は、訪れる者がその場を記憶し、他者に伝え、場合によっては抗議行動を誘発する強力な磁力を持った聖域であり、まさにアメリカ的な「聖地」なのである。そしてこのような貴重な歴史的遺産を大切に保存・整備し、その歴史と記憶を後世に語り継ぐことが今を生きる私たちに課された責務と言えよう。

【参考文献リスト】

- Foote, Kenneth E. *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*. 1997. Revised and Updated. Austin: U of Texas P, 2003.
- Inada, Lawson Fusao, ed. *Only What We Could Carry: The Japanese American Internment Experience*. Berkeley: Heyday Books, 2000.
- Mizuguchi, Mami, ed. *Bridge of Hope: The Road Traveled by Japanese-Americans*. Torrance, California: J & L P, 2007.
- Reader, Ian and Tony Walter, ed. *Pilgrimage in Popular Culture*. Wiltshire: Palgrave, 1993.
- Shirai, Noboru. *Tule Lake: An Issei Memoir*. 1981. Tr. Ray Hosoda. Ed. Eucaly Shirai and Valerie Samson. Sacramento: Muteki P, 2001.
- Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. 1982. Seattle: U of Washington P, 1993.
- National Park Service 編 'Manzanar' (U.S. Department of the Interior)
- 加藤好文「アメリカにおける史跡保存と『巡礼』の文化史的意義—日系アメリカ人収容所跡地をめぐって」(『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』28、2010年)
- 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』(世界思想社、2007年)
- 平本敦代監修「加州日系人慈恵会のしおり (2010年・咸臨丸サンフランシスコ寄港150周年記念)」(加州日系人慈恵会、2010年)
- 村上由見子『アジア系アメリカ人—アメリカの新しい顔』(中公新書、1997年)
- 村川庸子『アメリカの風が吹いた村—打瀬船物語』(愛媛県文化振興財団、1987年)
- 村川庸子『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人』(御茶の水書房、2007年)

ワークショップでは、戦争体験者の証言を聞くこともできた。パールハーバー攻撃時の元戦艦乗組員の証言、日系アメリカ人テッド・ツキヤマさんの開戦時から軍情報部隊での体験、また、本土での戦時収容所体験者リリー・ハタナカさんの証言を聞くことができた。さらにハワイ生まれのイズミ・ヒラノさんが広島での被爆体験などを語った。

以下、今回のワークショップに参加して考えた、また、現在考えているいくつかの点を紹介する。

2 戦跡巡礼

かつて戦闘が行われた跡地への訪問のほとんどは、戦死者の慰霊のためであると言える。アメリカ本土で戦争中に日本人や日系アメリカ人が収容された戦時収容所、たとえば、マンザナー収容所への巡礼も、そこで亡くなった人々のための慰霊碑に見られるように、鎮魂のためである。さらに、そうした巡礼は収容所体験を学び後世に伝える意義をもっている。最近、ハワイのオアフ島でもホノウリウリ収容所の跡地が特定され、発掘調査が進められている。毎年そこへの巡礼が行われるようになり、国史跡登録への準備も進められている。

同じオアフ島の真珠湾にある戦艦アリゾナ・メモリアル（記念館）への訪問も「巡礼」と位置づけられるかもしれない。記念館内の聖なる部屋 shrine roomからは戦艦や戦死者が沈んでいる海面が見える。部屋の壁面には戦死者の名前が列挙してある。

ワークショップでの講義を行った東京大学準教授矢口祐人氏は、アリゾナ・メモリアルが観光客が訪れるツーリスト・スポットなのか「聖なる場所」なのか、と問うたが、中世ヨーロッパで有名であったサンチャゴ巡礼でも、あるいは、江戸時代のお伊勢参りなどでも、巡礼と観光は結合していたことを忘れてはならない。

それでは、戦跡（war sites）が、しばしば聖地（sacred sites）となるのはなぜであろうか。多数の死が引き起こされた場所だからであろう。では、なぜ死の場所が聖地なのか。その地が犠牲、流血、遺骨と結びついているからであろうか。また、死は非業の死のみか。中世ヨーロッパのキリスト教であれば殉教者の死が目目される。しかし、キリスト教以前のヨーロッパでは、死と結びつかない聖地があった。古代ケルトやゲルマンの信仰では、自然の岩山、巨石、巨木や泉などがある場所が聖地あるいは巡礼地となっていた。これらは死と反対の生と結びついているようである。日本の聖地の場合も似ている。

戦跡が聖地となったイングランドでの事例として、1066年ノルマン征服後に、戦闘があったヘイスティングスに Battle Abbey（戦闘修道院）が建設された。その際、イングランド王であったハロルドの遺骨の引き渡しを母親が希望したが、ウィリアム征服王はそれを拒絶している。征服されたアングロ＝サクソン人たちの精神的抛り所となり、かれらの反乱の可能性を引き起こす聖地となることを警戒したからであった。

巡礼とは、基本的には罪の許しを求める行為であった。聖地には聖所・廟があり、そこには聖遺物が保管されていた。また、聖地は、癒しの場所である。巡礼者にとって神の奇跡による「復活」の場所である。巡礼者や訪問者は、殉教者や戦死者たちの犠牲のうえに自分たちの現在があることを確認する。そのことにより、巡礼者が未来に向けて生きる力を得る場所である。

3 戦争記念と平和祈念

戦争に関する歴史と記憶の問題を検討するときに、日本語での「記念」と「祈念」を意識的に区別して使用することが重要であろう。戦争博物館や平和博物館の名称がいずれであれ、多くは戦争の遺物・記憶を保管している。他方、中世ヨーロッパの聖地や教会における聖所（shrines）は、聖遺物（holy relics）、すなわち聖人の遺物や記憶を保管していたという点において、現在の博物館と似た機能を果たしていた。

ワークショップの講師のひとりリサ・ヨネヤマ教授は、「だれが過去についての記録を残すのか。だれがアーカイヴズを作ったのか。何についての記憶を、だれが、どういう視点から残すのか。どのような形で、だれのために、何の目的でそうするのか」との問題提起をした。文書館や資料館、さらには記念碑設立の目的は何であろうか。

筆者は、その目的が war memorial（過去を忘れないための戦争記憶）と monument for peace（未来に対する決意表明としての平和祈念モニュメント）が結びついたものであると考える。スローガンのには、Past memory for

future peace（未来の平和のための過去の記憶）と言えるのではないか。

以下、パールハーバーと広島を比較検討してみたい。

1) パールハーバーの場合

アリゾナ・メモリアルはwar memorial（戦争記念）なのか、あるいはpeace monument（平和祈念モニュメント）なのか、といった疑問が提起された。ワークショップで記念館を訪れたとき案内人のダニエル・マルティネット氏が、世界各地からの訪問者たちを巡礼者とみなすことで、この記念館が世界平和をめざす場所（巡礼地・聖地）と考えられないか、と述べたことに触発され、筆者は広島の平和公園と比較せざるを得なくなった。

パールハーバーは現在は軍地基地であり、そこに存在するのは、基本的に戦争を忘れないためのメモリアルであろう。少なくともまだ海中に残存する戦艦や死者の遺骸（パールハーバー・ゴースト）については、そうであろう。このことは戦艦アリゾナや戦艦ユタについて当てはまる。戦場に建てられた記念碑や慰霊碑は死者への弔いを表していると言えるが、ひとりひとりの犠牲者の名前を刻んだ標識はそのことを明示している。戦艦アリゾナと戦艦オクラホマについて当てはまる。

ホノルル市内にあるパンチボール（戦死者墓地）は先住ハワイ民族にとっての聖地であったところが墓地として使用されるようになった。広島市内の比治山にも陸軍墓地があり、かつて4000基あった墓が現在は3500基に整理されている。慰霊と戦争記念のための墓地としては、両者は似ているのかもしれない。

2) 広島の場合

原爆ドームは戦争の記憶を伝えるための戦争記念物war memorialであるといえる。その限りでは、現在ヒッカム空軍基地内の本部で銃撃跡を残す爆撃建物と似ているかもしれない。もっとも、保存目的は違っていると言わざるをえないであろう。平和公園内の慰霊碑cenotaphは平和を祈念するモニュメントpeace monumentとしての性格が強いのではないか。たしかに、「やすらかにお眠りください」（慰霊）と「あやまちは繰り返しません」（決意表明）が碑銘のなかでいっしょになっているが、死没者名が明示的ではなく、過去帳として納入されているため、そのような印象を与えるのであろう。

中世ヨーロッパ修道院での「死者の書」と似ているかもしれない。過去帳への記載は死者の魂の救済（安息）のため、弔いのためであるが、明示的ではない。もっとも修道院の場合は、当初、記載された人数が少数であったときには、個々人の名前すべてを祈りの際に呼んでいたと考えられている。

平和公園には平和を祈念するモニュメントが造られた。それらは、軍都広島から平和都市ヒロシマへの移行と平和の実現を世界へアピールするものであった。戦争記念物としての原爆ドームと同様に、他の犠牲者（コレアン）の碑は、死没者たちがその場（日本の中の広島）で亡くなったことを忘れないためのものであり、第一義的には魂の弔いのためであるとしても、戦争メモリアルとしての意義が大きい。記念碑を見る者は、なぜ彼や彼女が故国を遠く離れた異国のこの場所で死ななければならなかったのかに思いを馳せる。

広島原爆資料館には原爆の犠牲者の遺品や思い出が保存されている。訪問する人（巡礼者）たちは、ヒロシマ・ゴーストとでも言える死者との対話を行うことになる。生者が自己の生存の意味を確認できる死者との「和解」がもたらされることもある。広島の世界遺産である原爆ドームと宮島は、いっしょになって「世界遺産」の役割を果たしている。原爆ドームが人間が直面した過去の悲劇を思い出させるとすれば、宮島は巡礼者にとっての癒しの島である。

4 移民の個人史・家族史

太平洋戦争に関するナショナル・メモリー（国民的記憶）としては、パールハーバーから原爆投下までを話すアメリカ側と、主として原爆投下以後を話す日本側とでは、和解をめざす出会いは困難である。こうした相互のナショナル・メモリーの限界を克服するためには何が可能なのであろうか。

1) ハワイ移民の体験。

国境を越えて移動した人々（transnational people）とでも言える移民の個人史や家族史の中では、しばしばパールハーバーとヒロシマの2つが結びついている。広島からの移民やその家族は日米政府の決定により二重の犠牲になった。かれらの体験は、自分たちの犠牲のみを主張する傾向があるナショナル・メモリーをもつ人々に耳を傾けさせることができるのではないか。

1924年移民禁止法までのアメリカへの日本人移民では広島からの移民が多く、とくにハワイへの移民では最多であった。

1901年筆者の祖父が、5年後に祖母がハワイへ入国した。ハワイ生まれの父は教育のため5歳で帰国。祖母と下4人の子供が日本、祖父と上3人の子供がハワイに滞在し、家族が分離状態にあった。父が25歳のとき開戦となった。

1941年12月、日本政府の決定で真珠湾攻撃が行われ、ハワイで最多の広島移民が犠牲になった。ハワイの日本人移民たちは日本政府によって見捨てられた（棄民）。アメリカ本土でも同様であった。『引き裂かれた家族』には、ハワイの日本人や日系人の家族で親子や兄弟姉妹が別々に引き裂かれた7家族の悲劇が述べられている。

1945年8月、今度はアメリカ政府の決定により広島市民が犠牲になった。真珠湾攻撃によっては、ハワイの日本人や日系人14万人は、日本語教師や仏教僧侶など日系社会の指導者以外ほとんど収容されることはなかったが、原爆によってほぼ同数の広島市民が死亡した。

ワークショップで印象に残ったことのひとつは、太平洋諸島の人々が日米の間で「自分たちの戦争ではない」戦争によって影響を受けた、すなわち犠牲となったという事実を再認識させられたことである。同様に、日本人移民や日系アメリカ人の運命も日米政府の軍事的決定によって翻弄された。

2) 歴史における人の移動

太平洋諸島の人々が「自分たちの戦争ではない」戦争で犠牲になったことを考えるうちに、なぜ人は移動するのか、という大きな疑問に直面した。戦争をするために人の移動や植民地での定住が引き起こされた。たとえば、帝国維持のための開拓移民団もそうした事例であろう。

中世のヨーロッパでも、聖地への巡礼が戦争に結びついた場合もある。イスラム世界に近い辺境にキリスト教の聖地があり、それらの奪還や防衛のための戦争が行われた。

土地、領土、石油といった資源や利益を求めて人は移動した。典型的には帝国主義戦争がそれである。こうした移動は国家レベルでも個人的レベルでも同様である。ハワイへの出稼ぎも、官約移民から自由移民へと形態を変えていったが、かれらが富を蓄え定住するようになると先住民や先にやってきていた旧移民との競争関係を引き起こし、しばしば対立することになる。

こうしてみると、移民のための個人的動機が何であったとしても、また、形態がどうであったとしても、個人としての移民が国や世界の戦略（たとえば帝国主義）に影響されることがあったと言わなければならない。

ナショナル・メモリーの限界を克服するためにグローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーの視点から見るのが重要であることは否定できないが、同時に家族史・個人史といった個別史的な視点も有効であると言えるのではないか。むしろ、ナショナル・メモリーの限界を超えるのは、トランスナショナルな視点からというより、逆に、地域ないしは個人史的な視点からのアプローチが有効なのではないかと思われる。トランスナショナルはナショナルな要素から、また、ナショナルは地域的な要素から成り立っているのである。こうした見方は、統合理論や世界市民という発想に通じるのであろう。

おわりに

パールハーバーとヒロシマの「和解」を問題とするとき、なぜ和解は必要なのか、そして、だれのための和解かが、問われるべきであろう。たとえば、国家、元兵士、一般市民のレベルでの和解が想定される。日米の国家レベルでは、日米安全保障条約にもとづく軍事同盟関係にあるわけであり、和解は達成されていると言わなければならない。また、元兵士の間の和解とは戦争体験者相互の和解と言えるが、1995年真珠湾攻撃50周年記念のとき、日本からの元兵士の訪問団がハワイを訪れ、「友好の碑」をパンチボール墓地内に設置した。一部の人々の間であるとはいえ、和解が成立した。

筆者は、個人的には40年前の東西センター留学中にパールハーバー記念館を訪れたが、その時には広島出身者として、ほとんどがアメリカ人観光客の中にあって何かしらの違和感を感じた。周りの目を意識しすぎて居心地が悪かった。その時の体験と比べ、今回は花を捧げることができたせいか、心も落ち着き何かしら和解ができたように思った。そもそもパールハーバーをテーマにしたワークショップに参加すること自体が和解に向けての行動だったのかもしれない。

ナショナル・メモリーに影響される一般市民間の和解のためには、広島からハワイへの移民の体験を語ることが重要だとしても、それを知ることでその先どのように和解に結びつくのかは、なかなか困難な問題である。今のところ筆者としては、次世代（若い人々）間の交流が必要であると言えぬ。それは、和解のための平和教育の問題でもある。ナショナル・メモリーを克服するためには、次世代の教育が有効である。しかし、教育次第ではナショナル・メモリーを強めることもあることを忘れてはならない。若者に対して戦争被害の記憶のみがくり返し語られるなら、強固で偏った戦争観をもつことになるからである。

トランスナショナルな相互理解は、トランスナショナルな人的・知的交流によって可能となる。トランスナショナルな活動としては、若者による交流体験（異文化交流や戦跡訪問など）が考えられる。交流活動において、相手から質問されて初めて自分の文化や歴史について十分に知らないことを自覚する機会も得られるであろう。

歴史家としては、若者に何を伝えるのかと問われるなら、陳腐な表現になるが、過去を忘れてはならない、という答えしかない。忘れたら、同じ過ちを繰り返すことがあるからである。パールハーバーやヒロシマについて忘れるべきでない。それぞれを記憶するだけではなく、両方の悲劇を体験した広島移民たちがいることも忘れるべきではない。2つの見方だけでなく、第3の立場もある、という戦争についての多様な見方を語るべきである。また、パールハーバーにしても、アメリカによる併合、軍事基地化以前には、そこは先住ハワイ民族にとっては養魚場であり聖地でもあったという歴史的視点からも語るべきである。

なぜ、戦争は起きるのか。なぜ、人は移動し他国に住み、そして何が起きるのか。なぜ他国を侵略するのか。過去の戦争体験を忘れることなく、未来の平和実現のために何が可能なのかを、交流するなかで学ぶことができれば、ナショナル・メモリーのネガティブな面は克服できるかもしれない。

(資料：ワークショップでの講義と事前の課題文献)

“History and Commemoration: Legacies of the Pacific War” NEH Workshop
Workshop Reading List (Required)

General

Fujitani, Takashi, Geoffrey White, and Lisa Yoneyama. Introduction. In *Perilous Memories: The Asia Pacific War(s)*. T. Fujitani, G. White, and L. Yoneyama, eds. Durham, NC: Duke University Press, pp. 1-29. 2001.

Gallicchio, Marc S. Introduction. In *The Unpredictability of the Past : Memories of the Asia-Pacific War in U.S./East Asian Relations*. M. Gallicchio, ed. Durham: Duke University Press, pp. 1-12. 2007.

Jager, Sheila Miyoshi, and Rana Mitter. Introduction: Re-Envisioning Asia, Past and Present. In *Ruptured Histories : War, Memory, and the Post-Cold War in Asia*. S. M. Jager and R. Mitter, eds. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, pp. 1-14. 2007.

Rosenberg, Emily S. *A Date Which Will Live: Pearl Harbor in American Memory*. Durham, NC: Duke University Press, 2003.

White, Geoffrey. “Moving History: The Pearl Harbor Film(s)” In *Perilous Memories: The Asia-Pacific War(s)*, edited by T. Fujitani, G. White, and L. Yoneyama. Durham: Duke University Press, 2001.

Osorio, “The Pacific War in Hawaiian Culture and History”

Osorio, Jonathan Kamakawiwo'ole. "Memorializing Pu'uloa and Remembering Pearl

Harbor." In *Militarized Currents: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific*. Setsu Shigematsu and Keith Camacho, eds. Minneapolis: University of Minnesota Press, pp. 3-14. 2010.

Nishimoto, "The Hawai ' i Japanese American Experience: Racism, Heroism, and Beyond"

Odo, Franklin. Introduction: The Making of a Model Minority. In *No Sword to Bury: Japanese Americans in Hawaii during World War II*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 1-8. 2004.

Odo, Franklin. Pearl Harbor. In *No Sword to Bury: Japanese Americans in Hawaii during World War II*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 101-15. 2004.

Yaguchi, "Pearl Harbor and the Pacific War in Japanese History and Memory"

Yaguchi, Yujin. War Memories Across the Pacific: Japanese Visitors at the *Arizona Memorial*. In Marc Gallicchio, ed. *The Unpredictability of the Past: Memories of the Asia-Pacific War in East Asian Relations*. Durham: Duke University Press. pp. 234-252. 2007.

Sasaki, Takuya. Cold War Diplomacy and Memories of the Pacific War: A Comparison of the American and Japanese Cases. in *The Unpredictability of the Past: Memories of the Asia-Pacific War in U.S./East Asian Relations*. Durham: Duke University Press. pp. 121-152. 2007.

Camacho, "Pacific Islanders and the War: Guam and Saipan"

Camacho, Keith. From Processions to Parades. In *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory and History in the Mariana Islands*. Honolulu: University of Hawai ' i Press. 37 pp. (in press)

Camacho, Keith. Land Without Heroes. In *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory and History in the Mariana Islands*. Honolulu: University of Hawai ' i Press. 40 pp. (in press)

Morris-Suzuki, "Redrawing the Frontiers of Memory: Commemoration of the Pacific War in Cold War and Post-Cold War Japan"

Morris-Suzuki, Tessa. "Shadows on the Lens: Memory as Photograph." In *The Past Within Us: Media, Memory, History*. London & New York: Verso. pp. 71-119. 2005.

Morris-Suzuki, Tessa. "Angles of Vision: Comic Book Histories." In *The Past Within Us: Media, Memory, History*. London & New York: Verso. pp. 158-205. 2005.

Morris-Suzuki, Tessa. "Letters to the Dead: Addressing the Legacies of Violence in Japan ' s Borderlands." Paper presented at Vanderbilt University Seminar on Perspectives on Historical Violence. 19 pp. 2009.

Totani, "The Tokyo Trials: Continuing Relevance"

Dazai Osamu, December 8th. In *Columbia Anthology of Modern Japanese Literature, Vol. 1*. Columbia University Press, pp. 660-67. 2005.

Lebra, Joyce C., ed. *Japan's Greater East Asia Co-Prosperity Sphere in World War II*. Oxford University Press, pp. 73-81. 1975.

Robert Cryer and Neil Boister, eds. *Documents on the Tokyo International Military Tribunal*, Oxford University Press, pp. 522-526, 637-39, 676-77. 2008.

Yoneyama, "Hiroshima in Japanese and American National Memory"

Yoneyama, Lisa. For Transformative Knowledge and Postnationalist Public Spheres: the Smithsonian *Enola Gay Controversy*. In Fujitani, T., G. White, and L. Yoneyama, eds. *Perilous Memories: The Asia Pacific War(S)*. Durham, NC: Duke University Press. pp 323-346. 2001.

Yoneyama, Lisa. Ethnic Colonial Memories: The Korean Atom Bomb Memorial. In *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*. Berkeley: University of California Press. pp. 151-186. 1999.



正門立看板



1日目 公開講演会 柳澤康信学長挨拶



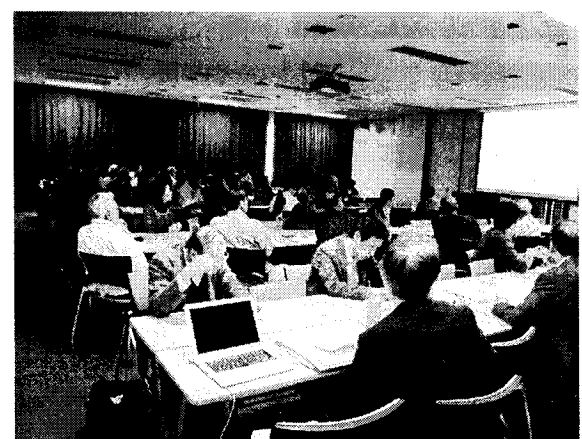
1日目 公開講演会 黒木幹夫法学部長挨拶



1日目 公開講演会 内田九州男研究代表挨拶



2日目 研究集会風景 1



2日目 研究集会風景 2